

道照遺跡発掘調査報告書

—(仮)御菌宇住宅団地造成工事に係る発掘調査—

2019

東広島市教育委員会

道照遺跡発掘調査報告書

－(仮)御菌宇住宅団地造成工事に係る発掘調査－

2019

東広島市教育委員会



a. 道照遺跡（1区・2区）完掘写真（北から）



b. 1区完掘写真（北西から）



c. 2区完掘写真（北から）

は し が き

東広島市は、県央の中核都市としての存在感が高まる中、「選ばれる都市、東広島」の実現に向けて、「仕事づくり」、「暮らしづくり」、「人づくり」、「活力づくり」、「安心づくり」の5つの施策に取り組んでいます。

中でも、都市としての持続的な成長を維持しつつ、地域の活性化、生活の質的向上が実感でき、「仕事も暮らしもナンバーワン」と評価されるまちづくりを目指し、公共交通ネットワークの利便性向上や交流・連携を支える交通基盤の整備などの重点施策を推進してきた結果、全国から注目を集める成長都市として発展しているところです。

一方、長い伝統と歴史とともに、内陸部の山々や美しい田園、瀬戸内海など居住地域を包むように広がる風光明媚で豊かな自然環境、「日本の20世紀遺産20選」に選定された西条の酒造施設群など多くの地域資源や魅力があります。

今回、発掘調査が実施された道照遺跡は、室町時代中期以前に成立していたと考えられる「道照館跡」とその周辺の集落跡で構成されており、城館跡に関連する施設が存在すると想定されています。

本報告書は、住宅団地造成に伴って実施した発掘調査の成果を記録したものです。地域の歴史を解明する一助となり、埋蔵文化財の保護に対する理解を深めていただくための資料として広く活用されることを願っております。

なお、発掘調査及び報告書作成にあたり、御指導、御協力をいただきました関係各機関、研究者の皆様及び地元の方々に対し、深く感謝いたします。

平成31年3月

東広島市教育委員会
教育長 津 森 毅

例 言

- 1 本書は、東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）が発掘調査を実施した、(仮)御園宇住宅団地造成工事に係る道照遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査並びに整理・報告書作成作業は、日吉海運有限会社から委託を受けて、平成 28～30（2016～2018）年度に市教委が実施した。
- 3 発掘調査は、市教委の主査石垣敏之、埋蔵文化財調査員日浦裕子・盛菜つみが担当し、市教委職員が協力した。
- 4 整理・報告書作成作業は石垣・盛が担当し、市教委職員が協力した。
- 5 遺構の実測・写真撮影は、石垣・日浦・盛が行った。
- 6 遺物の実測は、盛が行った。写真撮影は石垣・盛が行った。
- 7 測量用基準杭の打設は、株式会社丸一設計が実施した。
- 8 本書の内容は調査関係者で検討し、Ⅱを盛が、その他は石垣が執筆した。編集は石垣と盛が行った。
- 9 遺物実測図と写真図版の番号は同一である。
- 10 第 1 図は国土交通省国土地理院発行の 1：25,000 地形図『安芸西条・清水原』を使用した。第 3 図は東広島市発行の 1：2,500 東広島市地形図（Q-8）を使用した。
- 11 本書で使用した方位は、世界測地系座標北（国土座標第Ⅲ系）である。
- 12 本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。
SD：溝状遺構、SK：土坑、SW：堀、SX：性格不明遺構
- 13 調査で得られた資料については、すべて東広島市教育委員会が保管している。

調査体制

平成 28～30 年度

東広島市教育委員会

教育長：津森 毅

生涯学習部長：天神山勝浩（～平成 29 年 3 月 31 日）、下宮 茂（平成 29 年 4 月 1 日～）、
國廣政和（平成 30 年 4 月 1 日～）

文化課長：福光直美（～平成 29 年 3 月 31 日）

生涯学習部次長兼文化課長：岡田誠有（平成 29 年 4 月 1 日～）

参事兼出土文化財管理センター所長兼調査係長：妹尾周三

調査 調査係主査：石垣敏之、埋蔵文化財調査員：日浦裕子、盛菜つみ

事務 調査係主査：萩原真史（～平成 29 年 3 月 31 日）、松仁 猛（平成 29 年 4 月 1 日～）

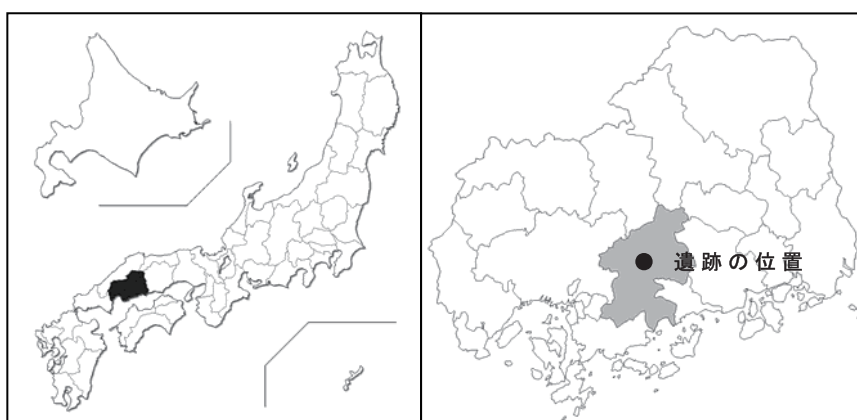
事務職員：片山由紀子

道照遺跡発掘調査報告書

目次

I	はじめに	1
II	遺跡の位置と環境	2
III	調査の概要	5
IV	遺構と遺物	9
	遺構	
	遺物	
	遺物観察表	
V	まとめ	16

抄録・奥付



広島県東広島市及び遺跡の位置

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1:25,000).....	3
第2図	道照館跡測量図 (1:2,000).....	5
第3図	遺跡周辺地形図 (1:2,500).....	6
第4図	遺構配置図 (1:100).....	折込
第5図	SD1・SK1 断面図、北側壁面・南側壁面実測図 (1:40).....	10
第6図	2区南側壁面実測図 (1:40).....	12
第7図	1区出土遺物実測図 (1:3).....	13
第8図	2区出土遺物実測図 (1:3).....	14
第9図	道照遺跡調査区配置図 (1:1,250).....	14
第10図	SW2 模式図.....	16

表目次

表1	遺物観察表
----	-------

巻頭図版目次

a.	道照遺跡 (1区・2区) 完掘写真 (北から)
b.1	区完掘写真 (北西から)
c.2	区完掘写真 (北から)

図版目次

図版扉	a. 調査前風景 (北東から)
	b. 調査前風景 (南西から)

図版 1a.1	区遺構検出状況 (北西から)
	b.1 区完掘状況 (北西から)

図版 2a.	SD1 検出状況 (北から)
	b.SK1 完掘 (北東から)
	c. 護岸の様子 (北から)
	d.SE1 完掘 (東から)

図版 3a.2	区作業風景 (北から)
---------	-------------

b.	第1面完掘 (東から)
c.	SW2 完掘 (北東から)
d.2	区完掘 (東から)

図版 4	出土遺物 1
図版 5	出土遺物 2
図版 6	出土遺物 3

Ⅰ はじめに

道照遺跡は、(仮)御藺宇住宅宅団地造成工事に伴って広島県東広島市西条町御藺宇字土井谷で発掘調査が実施された。以下、調査に至る経緯を概述する。

平成28年3月25日付けで株式会社丸一設計から東広島市教育委員会教育長へ文化財の有無及び取扱いについて協議があった。計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地「道照遺跡」に近接するため、東広島市教育委員会(以下「市教委」という。)は、分布調査(現地踏査)を実施した結果、平成28年4月5日付け、東広教文第863号で遺跡の有無及び範囲を確認するための試掘調査が必要な旨を回答した。平成28年4月8日付けで試掘調査の依頼があり、市教委が試掘調査を実施した。その結果、事業計画範囲の一部で溝状遺構(堀)や土坑などを検出し、道照遺跡の範囲が広がるものと判断されたため、平成28年5月12日付け東広教文第20号で道照遺跡を確認したことを回答した。

なお、試掘依頼の段階で、事業者が株式会社丸一設計から日吉海運有限会社(以下「事業者」という。)に変更された。

その後、市教委では、遺跡の現状保存や計画変更による遺跡の保存について事業者と協議を重ね、宅地部分などは盛土保存することとなったが、団地内道路と擁壁の一部については、記録保存も止むを得ないとして基本合意した。

平成28年6月17日付けで、事業者から埋蔵文化財発掘の届出(文化財保護法93条第1項)が提出された。団地内道路及び擁壁の一部については現状保存が困難であると判断され、記録保存のための事前の発掘調査が必要な旨を平成28年6月20日付け、東広教文第211号で通知した。

平成28年11月21日付けで事業者から市教委あてに発掘調査の依頼が提出され、平成28年11月30日付け、東広教文第484号で承諾する旨回答した。平成28年12月1日付けで、発掘調査の業務委託契約と覚書が締結され、平成29年2月13日から2月28日まで発掘調査(現地調査)を実施した。報告書作成作業及び収蔵作業は平成29年6月1日付け契約及び平成30年3月23日付け変更契約を締結して実施した。

本書は、以上のような経緯を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。当地の文化財資料として、また文化・歴史探究の一助として広く活用していただければ幸いである。

事業者である日吉海運有限会社、株式会社丸一設計、小川工務店から発掘調査・整理作業・報告書作成作業の便宜を図っていただいた。また、発掘調査にあたって、土地の所有者や地域の方々の多大なご協力を得た。末筆ながら記して心から感謝の意を表したい。

II 位置と環境

道照遺跡⁽¹⁾は、東広島市西条町御菌宇に所在する集落跡及び城館跡である。東広島市は、広島県南部のほぼ中央に位置し、市域の西部を広島市と接する人口約19万人の都市である。市域の中央には標高200m前後の西条盆地が広がり、平坦部を黒瀬川が蛇行して南流し、その周辺を標高約400～600mの山々が囲んでいる。当遺跡は西条盆地のほぼ中央に位置する丘陵のうち八幡山(337.2m)から東に派生した低丘陵の先端部に立地している。ここでは当遺跡周辺の遺跡について概観していく。

旧石器時代及び縄文時代の遺跡としては、後期旧石器時代と思われる住居跡や土坑が検出されている広島大学構内の西ガガラ遺跡(西条鏡山)や、多くの石器群が検出されている鴻の巣遺跡⁽²⁾がある。この石器群は水晶を主な石材としており、西条盆地では最古のものと考えられている。その他、山中池南遺跡第6地点(西条鏡山)では、縄文時代早期前半期の条痕文土器や遺構が確認されている。

弥生時代の遺跡は多数確認されているが、弥生前期の遺跡は少なく、中期後半頃から遺跡数は増加する傾向にある。前期～中期の遺跡としては、友松3号遺跡⁽³⁾、小西遺跡⁽⁴⁾、助平2号遺跡⁽⁵⁾、黄幡1号遺跡⁽⁶⁾などがある。黄幡1号遺跡では多量の木製品が出土しており、木材を加工する前段階の貯木場的な施設と推定されている。後期では、古市4号遺跡⁽⁷⁾、助平1号遺跡⁽⁸⁾、大楨2・3号遺跡^(9・10)、鏡西谷遺跡⁽¹¹⁾などがある。鏡西谷遺跡からは後期前葉を主体とする高地性集落が検出されている。

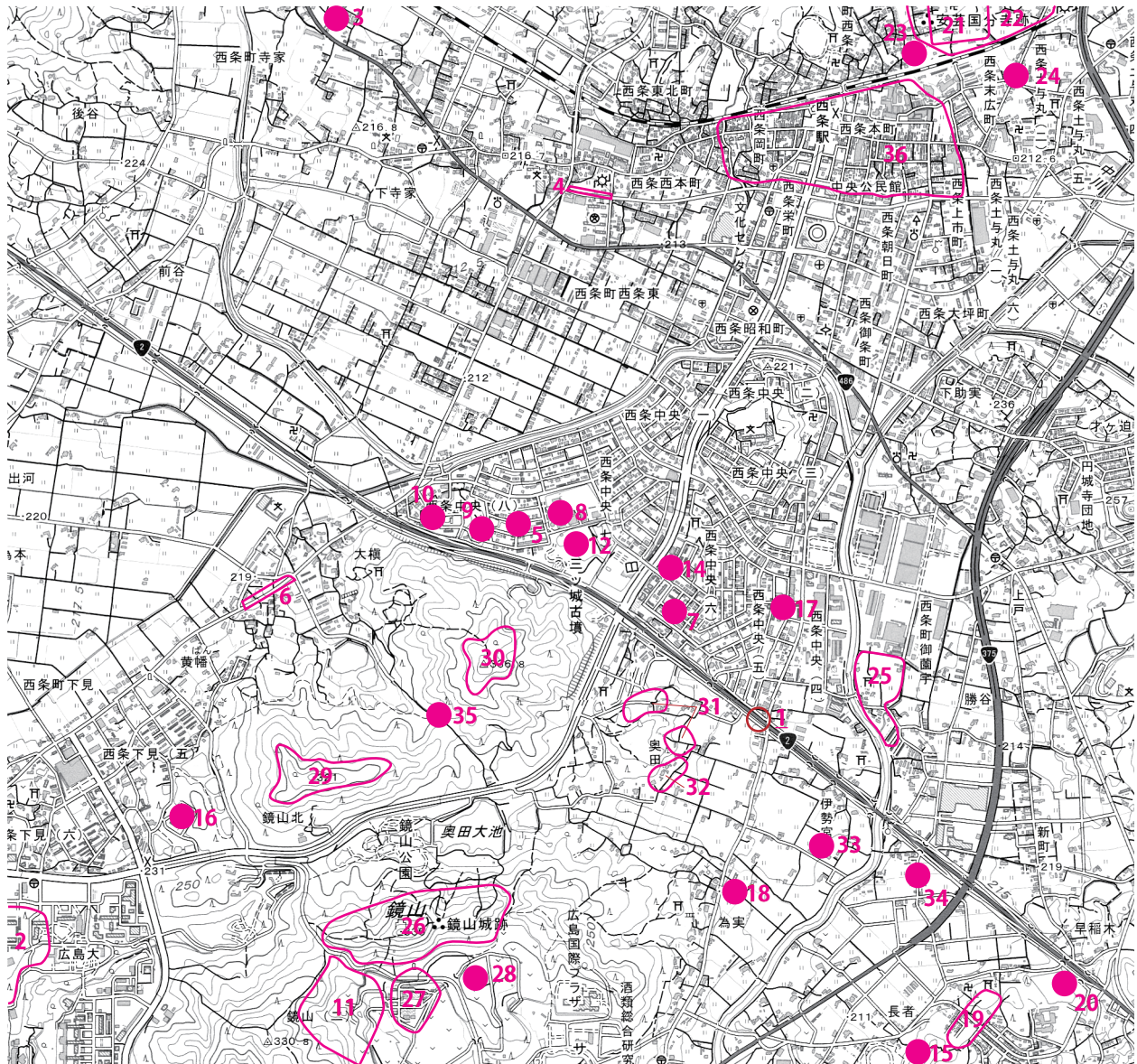
古墳時代に入ると、多くの古墳が確認されている。5世紀前半に築造された県下最大規模の前方後円墳である三ッ城古墳⁽¹²⁾のほかに、竪穴式石室を持つ助平古墳⁽¹³⁾、狐が城古墳⁽¹⁴⁾や、帆立貝式古墳の長者スクモ塚古墳⁽¹⁵⁾が存在する。集落跡としては、助平2号遺跡、陣が平西遺跡⁽¹⁶⁾などの集落遺跡が確認されている。陣が平西遺跡では、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器焼成窯跡と集落跡が検出された。その他周辺の集落遺跡は、才の木遺跡⁽¹⁷⁾、宮の前遺跡⁽¹⁸⁾、長者遺跡⁽¹⁹⁾、早稲木遺跡⁽²⁰⁾が存在する。

律令時代、当地域は安芸国賀茂郡に属しており、安芸国分寺(現史跡安芸国分寺跡)⁽²¹⁾が建立された。その周辺には安芸国分寺周辺遺跡⁽²²⁾や土器や瓦とともに人形木簡が出土した聲門遺跡⁽²³⁾がある。また、安芸国分寺の建立にあたり、関連すると考えられる窯跡が三永水源地周辺で確認できる。集落跡としては、掘立柱建物跡が検出された平田遺跡⁽²⁴⁾や勝谷遺跡⁽²⁵⁾がある。

中世になると、山口県に本拠を置く大内氏が東方進出の足掛かりとして築城した鏡山城跡⁽²⁶⁾をはじめとし、数多くの山城や、城館跡が出現する。鏡山城周辺には、鏡山城を警護する武士団の日常居住区と想定される鏡東谷遺跡⁽²⁷⁾、敵の侵入等に対する防御施設と考えられる鏡西谷遺跡、中世墓地の鏡千人遺跡⁽²⁸⁾が存在する。出土遺物等からみて、この3つの遺跡は15世紀後半に存在していたと考えられる。狐が城跡は山城としては小型であるが、交通の要所であり西条盆地を一望できる立地であることから、見張り所または砦的性格を持つ城であると考えられる。1523年出雲の尼子勢が鏡山城に攻め入る際に、使

用した陣が平城跡⁽²⁹⁾や八幡山城跡⁽³⁰⁾がある。その他、卯月城跡(西条町御藪宇)、阿瀬地城跡(西条町御藪宇・下三永)などの城館が確認されている。集落跡としては、卯留1・2号遺跡⁽³¹⁾、奥田1・2号遺跡⁽³²⁾、伊勢宮遺跡⁽³³⁾、中長者遺跡⁽³⁴⁾などがある。また、峠信仰に関わる黄幡第4号古墓⁽³⁵⁾や地鎮儀式が行われたとされる才免遺跡(西条町寺家才免)などの民間信仰が見受けられる遺跡も存在している。

近世の遺跡としては、西国街道の宿場町として栄えた四日市遺跡⁽³⁶⁾は近世から幕末に掛けての宿場町の様相を伝えている。



1. 道照遺跡
2. 鴻の巣遺跡
3. 友松3号遺跡
4. 小西遺跡
5. 助平2号遺跡
6. 黄幡1号遺跡
7. 古市4号遺跡
8. 助平1号遺跡
9. 大槓2号遺跡
10. 大槓3号遺跡
11. 鏡西谷遺跡
12. 史跡三ツ城古墳
13. 助平古墳
14. 狐が城遺跡(狐が城古墳)
15. 長者スクモ塚古墳
16. 陣が平西遺跡
17. 才の木遺跡
18. 宮の前遺跡
19. 長者遺跡
20. 早稲木遺跡
21. 史跡安芸国分寺跡
22. 安芸国分寺周辺遺跡
23. 聲門遺跡
24. 平田遺跡
25. 勝谷遺跡
26. 鏡山城跡
27. 鏡東谷遺跡
28. 鏡仙人塚遺跡
29. 陣が平城跡
30. 八幡山城跡
31. 卯留1・2号遺跡
32. 奥田1・2号遺跡
33. 伊勢宮遺跡
34. 中長者遺跡
35. 黄幡第4号古墓
36. 四日市遺跡

第1図 周辺遺跡分布図(1:25,000)

註

- (1) 『道照遺跡』 広島県教育委員会 昭和 57 (1982) 年
- (2) 「鴻の巣遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 広島大学埋蔵文化財調査室 平成 19(2007) 年
- (3) 『友松 2・3 号遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成 26(2014) 年
- (4) 『小西遺跡発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成 10(1998) 年
- (5) 『友松 2・3 号遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成 26(2014) 年
- (6) 『黄幡 1 号遺跡発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成 17(2005) 年
- (7) 「助平 1 号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (I)』 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和 58(1983) 年
- (8) 「大楨 2 号遺跡」『大楨遺跡群』 財団法人広島県埋蔵文化財センター 昭和 60 (1985) 年
- (9) 「大楨 3 号遺跡」『大楨遺跡群』 財団法人広島県埋蔵文化財センター 昭和 60 (1985) 年
- (9) 「鏡西谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 平成 15(2003) 年
- (10) 『史跡三ツ城古墳発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成 16(2004) 年
- (11) 「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (I)』 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和 58(1983) 年
- (12) 「狐ヶ城跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (I)』 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和 58(1983) 年
- (13) 『前方後円墳集成 - 中国・四国編』 山川出版社 平成 3 (1991) 年 / 『探訪・広島古墳』 芸備友の会 平成 3 (1991) 年
- (14) 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』 広島大学埋蔵文化財調査室 平成 20 (2008) 年
- (15) 『広島県遺跡地図Ⅱ』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (16) 『広島県遺跡地図Ⅱ』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (17) 『広島県遺跡地図Ⅱ』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (19) 『広島県遺跡地図Ⅱ』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (19) 『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅸ』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成 11～19(1999～2007) 年
- (20) 『安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成 21(2009) 年
- 「安芸国分寺周辺遺跡」『聲門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成 27(2015) 年
- (21) 「聲門遺跡」『聲門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成 27(2015) 年
- (22) 『平田遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成 17(2005) 年
- (23) 『三永水源地窯跡群詳細分布調査報告書』 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成 19(2007) 年
- (24) 『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第 2 集』 広島県教育委員会 平成 6(1994) 年
『鏡山城その歴史と意義 - 大内氏の地方支配を探る -』 東広島市教育委員会 平成 11(1999) 年
- (25) 「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 平成 15(2003) 年
- (26) 「鏡千人塚遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 平成 15(2003) 年
- (27) 『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第 2 集』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (28) (29) と同様
- (29) 『広島県遺跡地図Ⅱ』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (30) 『広島県遺跡地図Ⅱ』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (31) 『広島県遺跡地図Ⅱ』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (32) 『広島県遺跡地図Ⅱ』 広島県教育委員会 平成 6 (1994) 年
- (33) 『黄幡第 4 号古墓発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成 21 (2009) 年
- (34) 『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成 16～19(2004～2007) 年

Ⅲ 調査の概要

発掘調査は、試掘調査によって得られたデータ（遺構面までの深さ、堆積土・遺物包含層の状況、遺物の出土状況など）を基に、重機を使用して表土を掘削し、遺構検出面を人力で精査して行った。

調査区は、1区（団地内道路の一部）と2区（擁壁の一部）に分かれている。両調査区の北面は旧耕作地の法面になっており、斜面となっている。

1区の南東側は、表土（肥土・床土）直下で遺構（地山）面が露出している。一方、北西側は法面の表土を除去すると、地山の岩盤が露呈した。一見すると人為的な構築物見えるが、花崗岩の風化による亀裂が偶然石垣のようになっていた。その自然の岩盤を法面の護岸に活用した様子がうかがえた。

その他の遺構は、土坑1基と溝状遺構1条が検出された。遺構面の標高は、224.1m～224.4mでほぼ平坦となっており、耕作地造成による削平のためと考えられる。

なお、1区北側法面の表土から、近現代の遺物を大量に出土しており、明治時代にゴミの一括廃棄があったものと考えられる。

2区は、いわゆる「道照館」の西側に位置する。現状地盤から約1.5m下で硬化面が確認されたため、第1遺構面として精査した。遺構が確認されなかったため、さらに掘り下げた結果、地山面から“堀”の一部と考えられる溝状遺構が検出された。この堀の底面から館跡の頂部までの高低差は約5mである。

検出された遺構は、溝状遺構（堀）1条、土坑2基である。

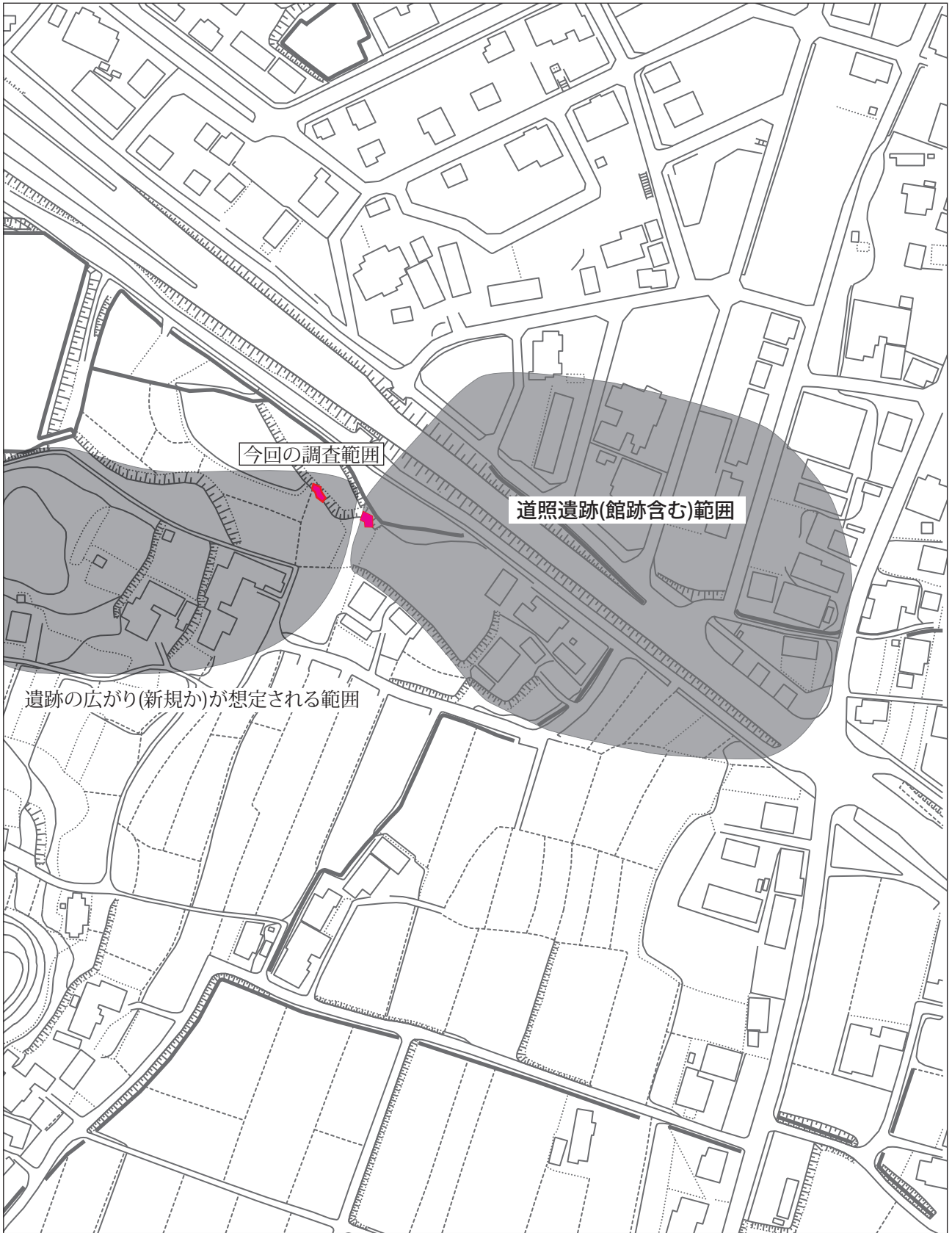
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、石製品などがコンテナ（340mm×540mm×100mm）10箱分出土した。多くは江戸時代～明治時代の土師質土器・陶磁器・瓦である。

出土した遺物は、水洗と注記作業を実施し、接合と復元作業、実測・写真撮影などの記録を行った。整理作業及び報告書作成作業を進めながら、保管のための分類・収蔵作業も実施した。



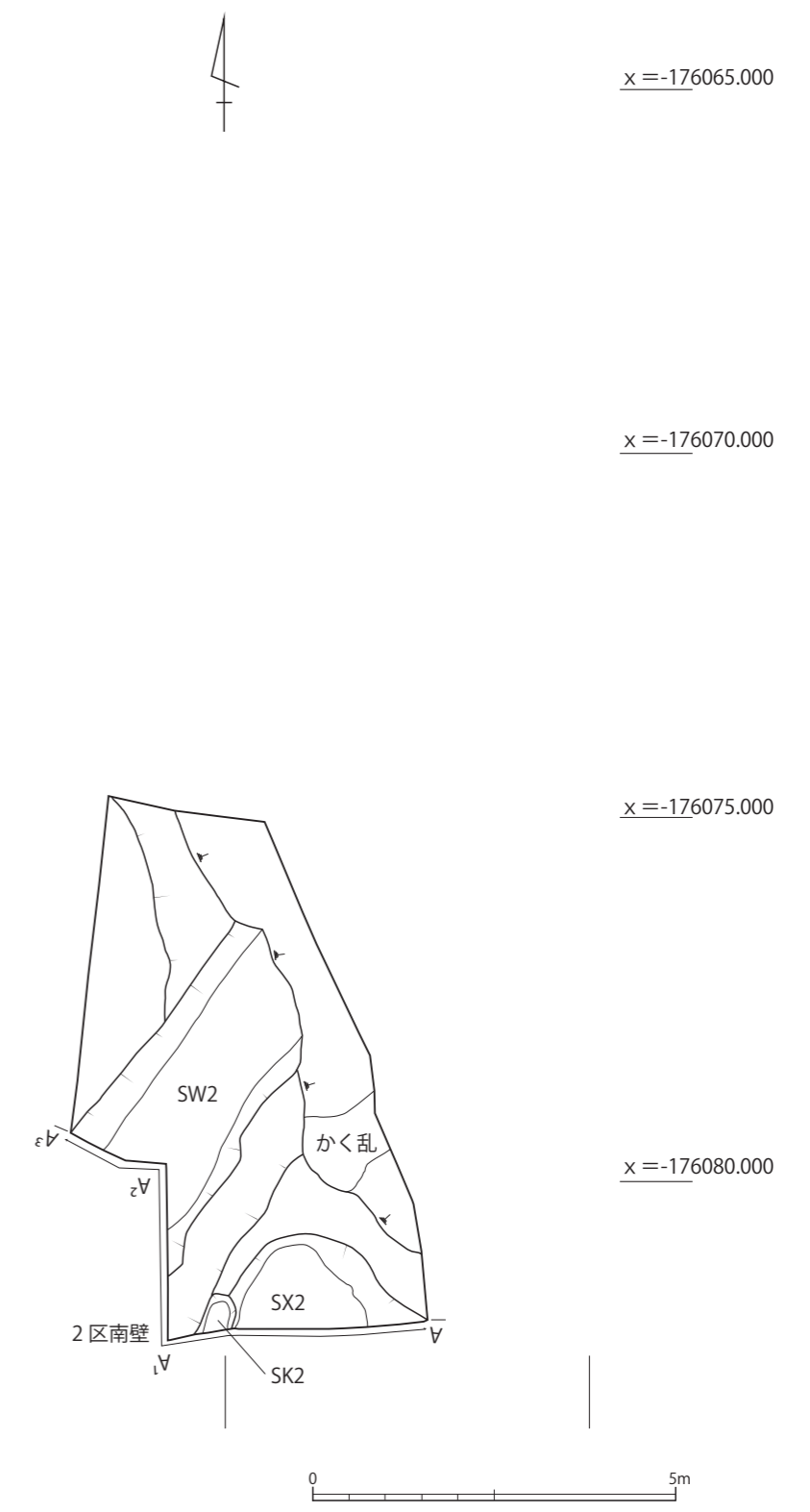
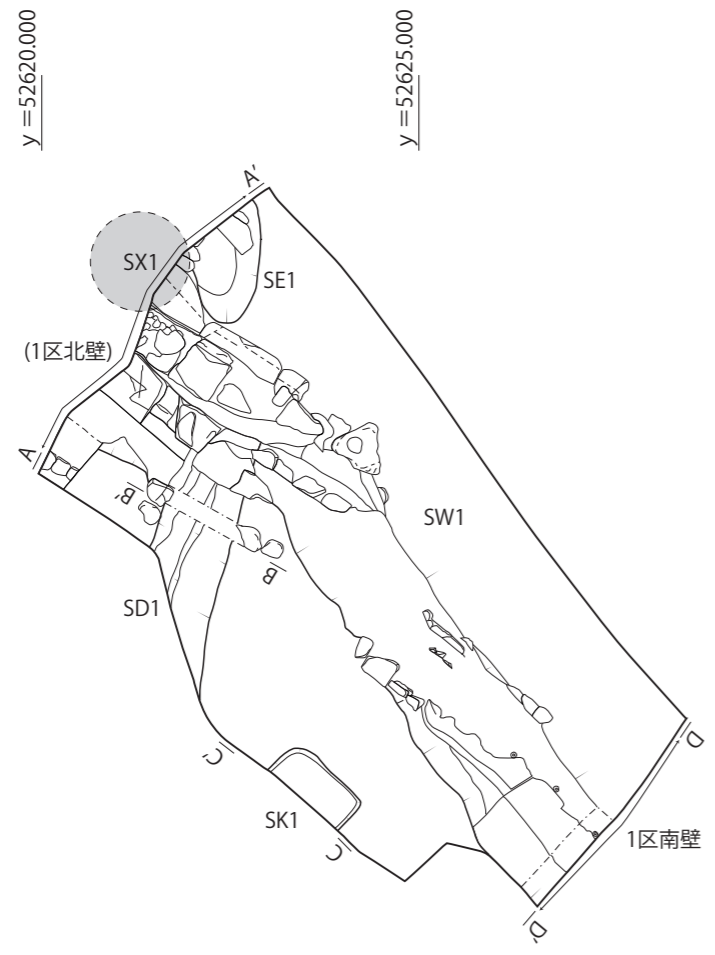
第2図 道照館跡測量図（1：2,000）

※広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第2集 1994 から抜粋



第3図 遺跡周辺地形図 (1 : 2,500)

赤塗は今回の調査区、灰色は遺跡の範囲



第4図 遺構配置図 (1:100)

IV 遺構と遺物

1 区の遺構と遺物

SD1 (第4・5図、図版2)

調査区南西部の平坦面に位置し、調査区外へ延びる溝状遺構である。検出状況での長さ約2.7m、幅約1m、深さ約0.25mを測る。中央に径3cm～拳大程度の礫を多く含んだ層がある。

出土遺物の様相から、江戸時代後期の遺構と考えられる。

出土遺物 (第7図1～7、図版4)

1～4は土師質土器である。1～3は鍋である。4は羽釜である。

5・6は肥前系の陶胎染付である。7は肥前系磁器の皿である。

SK1 (第4・5図、図版2)

調査区南西部で検出した、平面形が方形を呈する土坑である。約半分が調査区外に続くが、長さ1.2m、深さ0.25mを測る。表土直下で検出されており、遺物は出土していないが近現代の遺構と考えられる。

SE1 (第4・5図、図版2)

1区の調査範囲北端で検出された、平面形が不整形円形を呈する土坑である。検出状況で、直径0.8m、深さ0.4mを測る。

図示し得なかったが、土師質土器・瓦質土器、肥前系磁器の広東碗、黒瓦、須恵器、鉄滓などが出土している。

SV1 (第4・5図、図版1)

調査区の中央部に位置する耕作地の法面である。検出状況は、巨石を使用した石垣に見えるが、花崗岩の自然石が露呈したものである。一部には、木杭を打設した状況が観察されており、法面を削り出す際に露出した自然石をそのまま護岸として利用したものと考えられる。

遺物の多くは、調査区北半の巨石が集中する場所から出土している。図示したものの他、瓦(赤瓦が多くを占める)や須恵器などが多量の礫(拳～人頭大)と共に出土しており、護岸の裏込めとして投げ込まれた可能性もある。

出土遺物 (第7図8～17、図版4・5)

8～13は土師質土器の鍋である。14～16は肥前系の陶磁器である。14は皿、15は端反碗、16は陶胎染付の碗である。17は須恵器の蓋である。

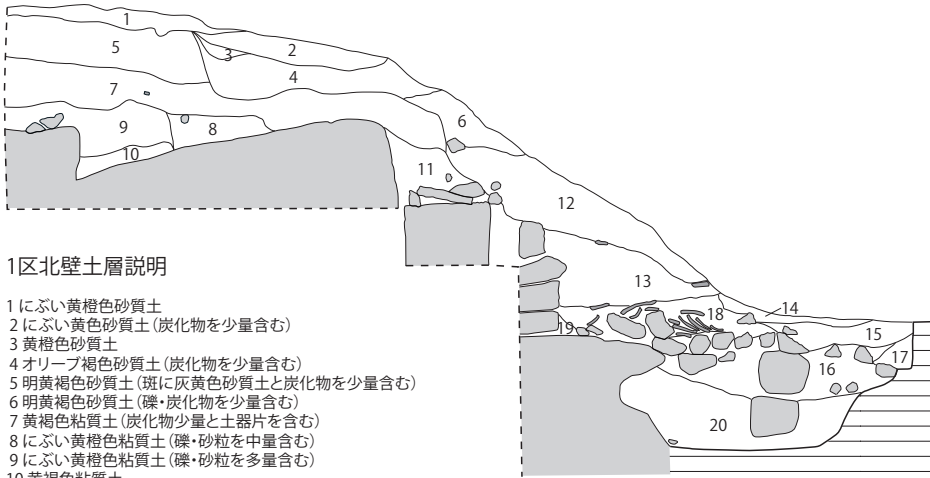
SW1 (第4・5図、図版1)

調査区の北側～東側へ続いている。旧耕作地の法下にあたり、溝というより耕作地を造成するために削りだした平坦面の可能性がある。

埋土には、近世の陶磁器から現代の農薬袋まで含んでいたが、地山面に張り付く様に若干の遺物が出土している。図示したものの他、陶器(壺 or 甕)の底部など中世の可能性のある遺物も存在するが、主として近世以降のものと考えられる。

A

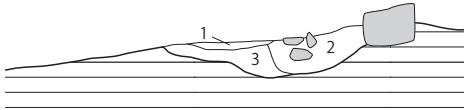
218.500m A'



1区北壁土層説明

- 1 にぶい黄褐色砂質土
- 2 にぶい黄色砂質土(炭化物を少量含む)
- 3 黄褐色砂質土
- 4 オリーブ褐色砂質土(炭化物を少量含む)
- 5 明黄褐色砂質土(斑に灰黄色砂質土と炭化物を少量含む)
- 6 明黄褐色砂質土(礫・炭化物を少量含む)
- 7 黄褐色粘質土(炭化物少量と土器片を含む)
- 8 にぶい黄褐色粘質土(礫・砂粒を中量含む)
- 9 にぶい黄褐色粘質土(礫・砂粒を多量含む)
- 10 黄褐色粘質土
- 11 褐色やや粘質土(礫を多量に含む)
- 12 褐色粘質土(礫・砂粒・遺物片を多量含む)
- 13 黄褐色粘質土(礫・砂粒・遺物片を多量含む)
- 14 黄褐色粘質土(礫・砂粒・遺物片を多量含む)
- 15 灰色粘質土(土器片を含む)
- 16 暗灰黄色砂質土(径1~3mm程度の砂粒を多量含む)
- 17 オリーブ黒色粘質土
- 18 黄褐色砂質土(遺物・拳~人頭大の石を多量含む)
- 19 黄褐色砂層
- 20 褐灰粘土層(植物遺体若干含む)

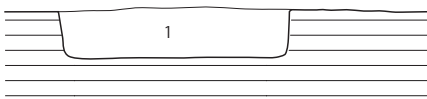
B 218.000m B'



SD1土層説明

- 1 灰黄褐色砂層
- 2 にぶい黄褐色砂質土
- 3 褐色砂質土

C 218.500m C'

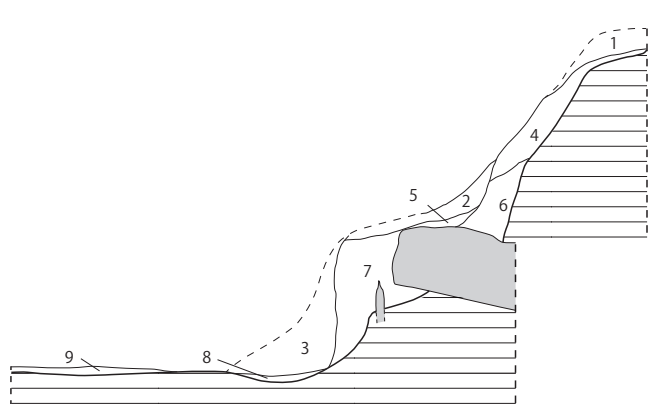


SK1土層説明

- 1 褐色砂質土

D

218.500m D'



南側壁面土層説明

- 1 暗褐色砂質土
- 2 暗褐色砂質土
- 3 暗褐色砂質土
- 4 黄褐色砂質土(やや砂粒が大きい)
- 5 褐色砂質土
- 6 褐色砂質土
- 7 褐色砂質土
- 8 褐灰色砂質土
- 9 褐灰色砂質土



第5図 SD1、SK1、南側壁面、北側壁面 実測図 (1:40) 石

出土遺物（第 7 図 18～20、図版 5）

18～20 は土師質土器の鍋である。

SX1（第 4・6 図）

調査区北西部～調査範囲外の表面に、陶磁器・土師質土器・瓦の集中部があったため、表採したものである（図版 6）。陶磁器は、江戸時代後期～明治時代初期のものである。磁器には、西洋コバルトを使用した型紙摺りは含まない。瓦は、赤瓦と黒瓦（丸瓦と棧瓦）が混在する。他に、長さ約 38cm の鞆の羽口が出土している。

2 区の遺構と遺物

第 1 遺構面（第 4・6 図、図版 3）

現状地盤から約 1.7m 下で検出された硬化面「南壁土層図（第 6 図）6・7 層」である。土層観察によると、第 1 硬化面直上の 5 層（灰黄褐色土）が旧耕作土で、6・7 層はその床土と考えられる。「道照館跡」の堀跡と想定した SD2 が完全に埋まったあとに整地したものと考えられるが、整地の時期は不明である。

第 2 遺構面（第 4・6 図、図版 3）

いわゆる地山で検出した遺構面である。調査範囲が限定され、遺物もわずかな土師質土器片しか出土しなかったため詳細は不明であるが、「道照館跡」に関連すると考えられる堀跡（SW2）が確認された。

埋土から出土した遺物のほとんどは土師質土器で、弥生土器・須恵器、陶磁器と鉄滓がそれぞれ 1～2 点出土している。陶器の播鉢も体部の破片であり、産地・時期ともに不明である。土師質土器のうち、口縁端部に緩やかな張り出しを持つものが存在しており、中世というより近世的な印象を受ける。

SW2（第 4・6 図、図版 3）

調査区の中央部（第 2 面）で検出され、調査区外へと延びる溝状遺構である。検出状況での長さ約 4m、幅約 2m、深さ 1.1m を測る。

この溝の東側には「道照館跡」が存在し、館内で最も高所の廓がある。斜面は切岸状となっており、溝底部と廓の高低差は約 5m を測る。

埋土からの出土遺物は、土師質土器のみである。

出土遺物（第 8 図 21～24、図版 6）

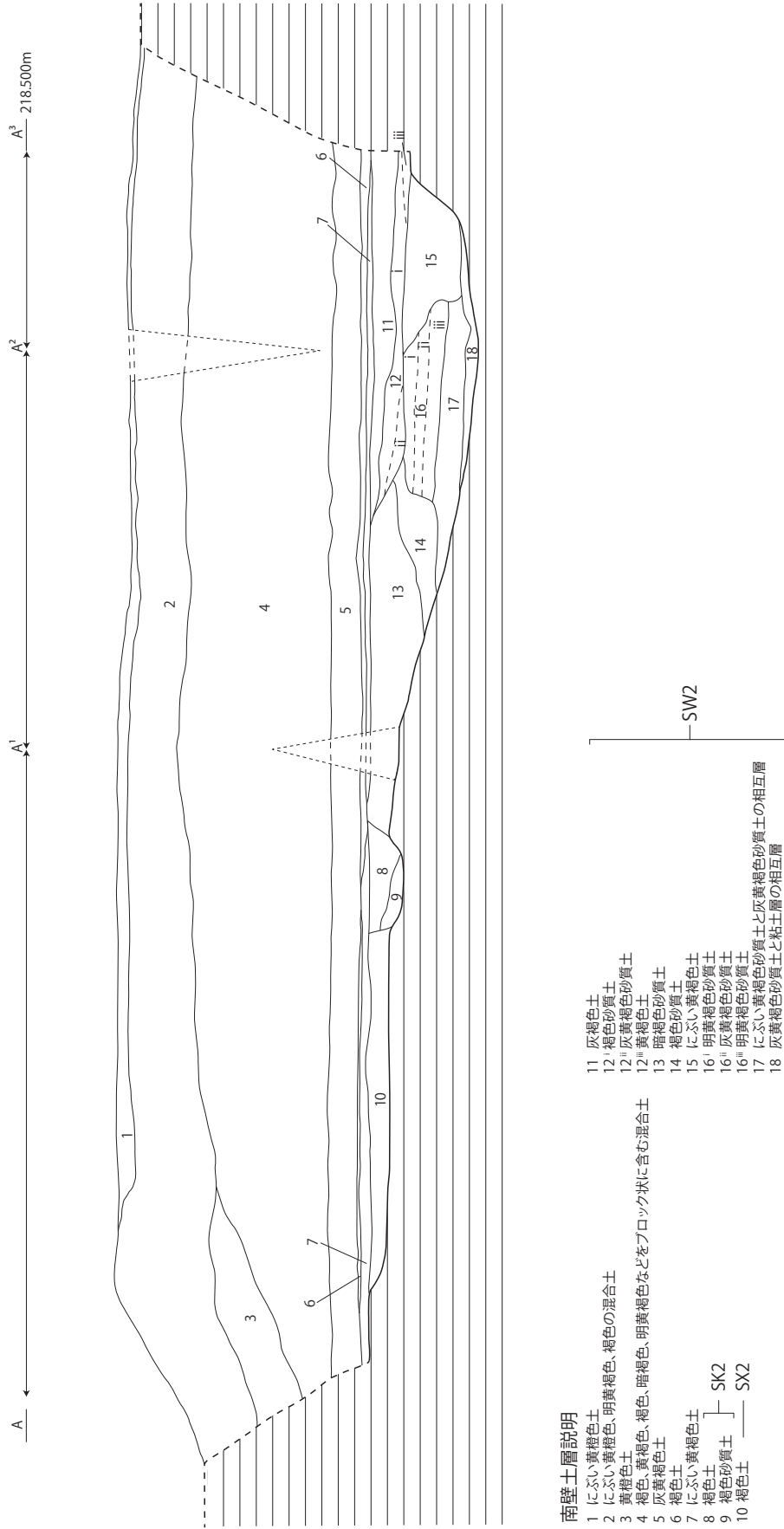
21 は SW2 から出土した土師質土器の鍋である。

22～24 は埋土の出土である。22 は、内面が無釉であり肥前系の瓶と考えられる。23・24 は土師質土器の鍋で、24 には内耳が存在する。

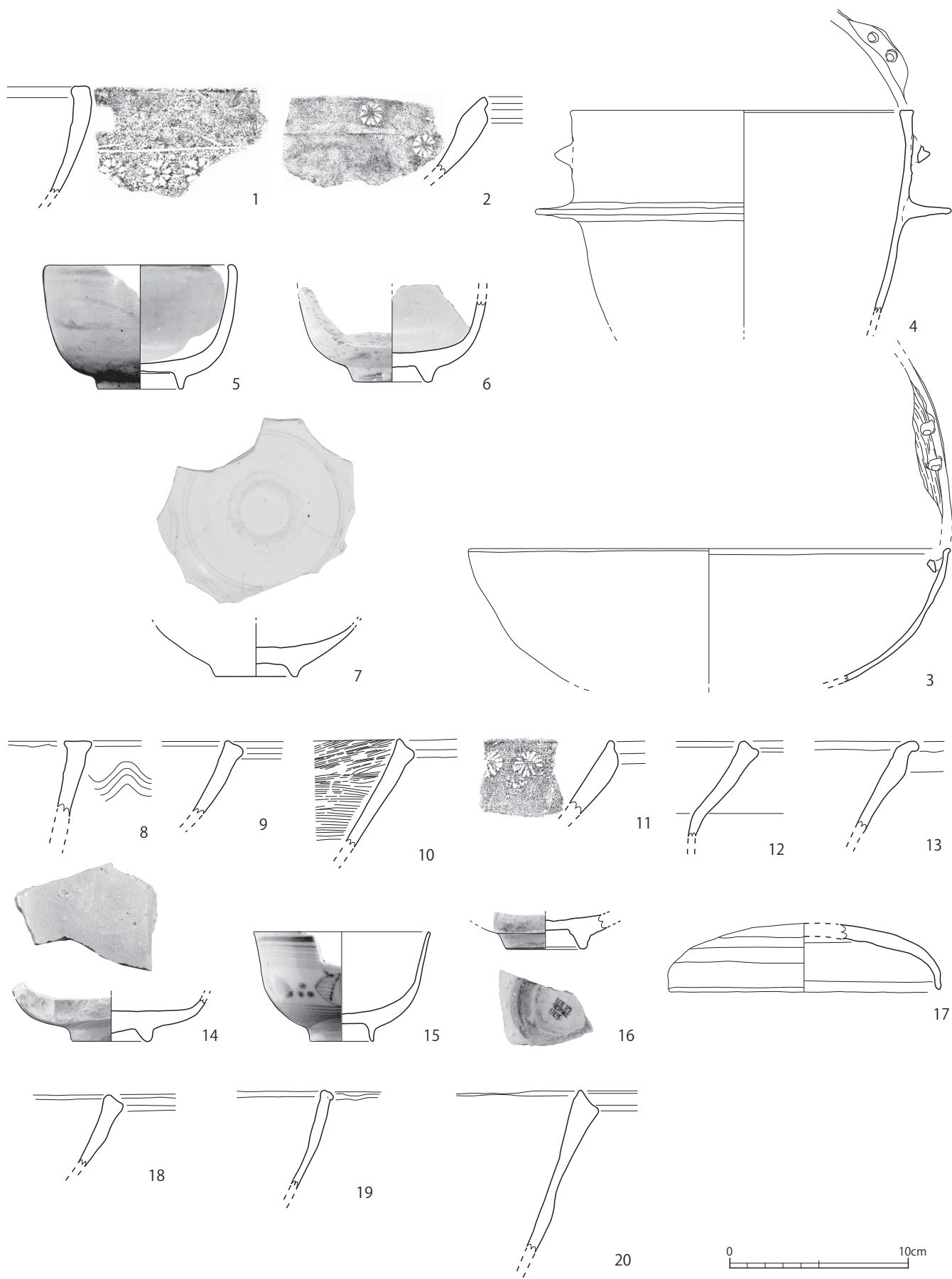
SK2・SX2（第 4 図）

調査区南部（第 2 面）で検出した、平面形が不整円形を呈する土坑である。

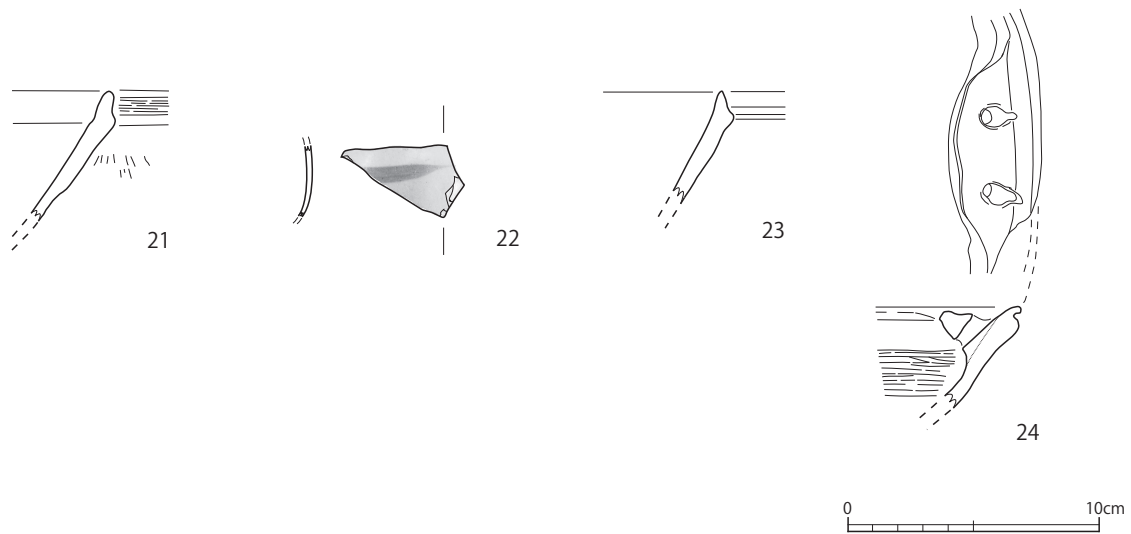
SW2・SK2・SX2 が切りあっているが、断面観察による新旧関係は、SK2 が第 1 遺構面の硬化層直下から掘り込まれており、SW2 と SX2 を切っている。



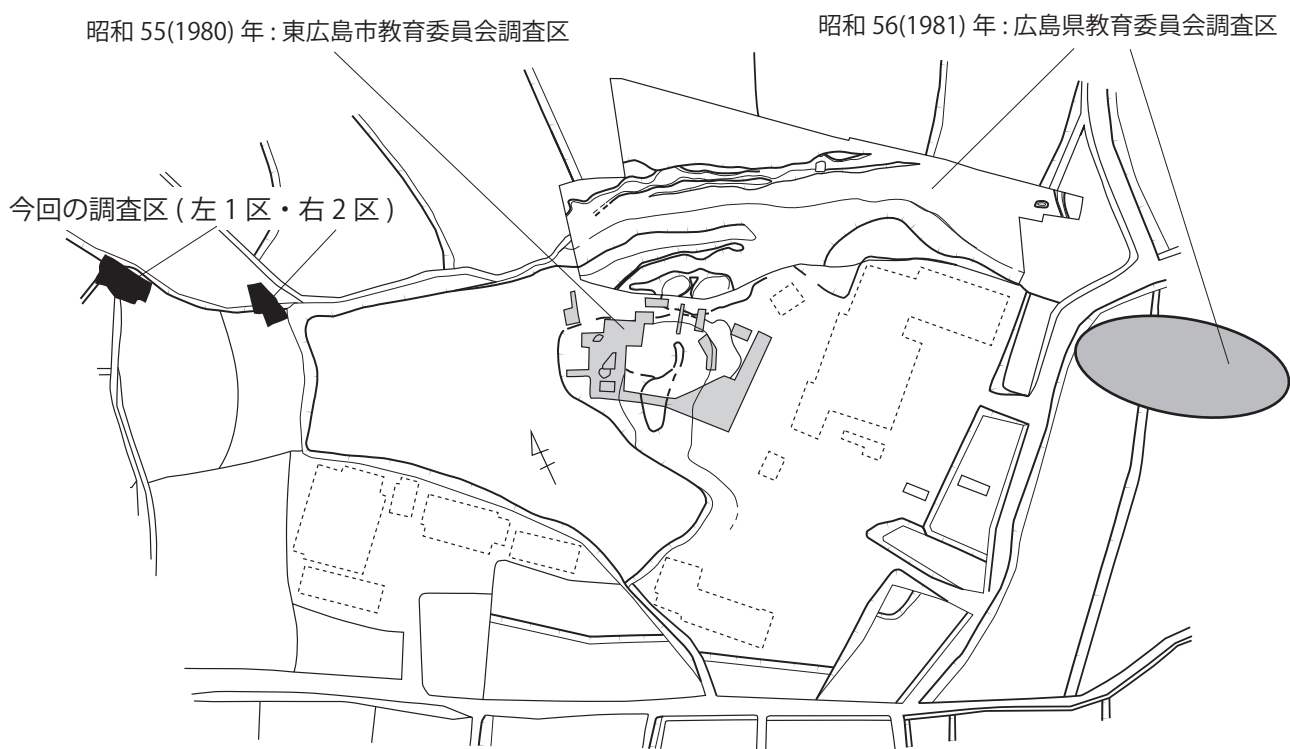
第6図 2区南壁断面 実測図 (1:40)



第7图 1区出土遗物实测图(1:3)



第 8 図 2 区出土遺物実測図 (1 : 3)



第 9 図 道照遺跡調査区配置図 (1 : 1,250)

表1 道照遺跡 遺物観察表

遺物 番号	出土地 点	種別	器種	法量(cm) ()は復元値	胎土	焼成	色調	調整	備考
1	SD1	土師質土器	甗	口径:- 器高:- 底径:-	密	不良	外面:淡黄 内面:にぶい黄橙	外面:ナデ 内面:ナデ	砂粒多粗 外面:菊の刻印
2	SD1	土師質土器	鍋か?	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:灰黄褐 内面:灰黄	外面:ナデ 内面:ナデ	外面口縁部付近、菊の刻印
3	SD1	土師質土器	焙烙	口径:(26.8) 器高:- 底径:-	密	良	外面:灰黄褐 内面:にぶい黄橙	外面:ナデ 内面:ナデ、内耳貼付	内外面スス付着
4	SD1	土師質土器	羽釜	口径:(21.2) 器高:- 底径:-	密	良	外面:浅黄橙 内面:浅黄	外面:ナデ、外耳・羽部貼付、 指押さえ 内面:ナデ	外面スス付着 在地形
5	SD1	陶器	碗	口径:(10.4) 器高:残存6.9 底径:4.7	密	良	外面:灰白 内面:灰白	外面:- 内面:-	肥前系、陶胎染付 胴部:唐草文か?
6	SD1	陶器	碗	口径:- 器高:残存4.5 底径:4.4	密	良	外面:灰白 内面:灰白	外面:- 内面:-	肥前系、陶胎染付 胴部:唐草文か?
7	SD1	磁器	皿	口径:- 器高:- 底径:4.5	密	良	外面:灰白 内面:灰白 胎土色:灰白	外面:- 内面:-	肥前系 見込:蛇の目釉剥ぎ 二重斜格子文
8	SV1	土師質土器	土器片	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:灰白 内面:灰白	外面:ナデ 内面:ナデ	外面波条文
9	SV1	土師質土器	土器片	口径:- 器高:- 底径:-	粗	良	外面:にぶい黄橙 内面:灰白	外面:ナデ 内面:ナデ	
10	SV1	土師質土器	土器片	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:橙 内面:にぶい黄橙	外面:ナデ 内面:ナデ後刷毛目	
11	SV1	土師質土器	鍋か?	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:灰 内面:灰	外面:ナデ 内面:ナデ後刷毛目	砂粒多粗 外面口縁部付近、菊の刻印
12	SV1	土師質土器	鍋か?	口径:- 器高:- 底径:-	粗	良	外面:にぶい黄橙 内面:浅黄橙	外面:ナデ 内面:ナデ	外面スス付着
13	SV1	土師質土器	鍋か?	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:浅黄橙 内面:灰白	外面:ナデ後刷毛目 内面:ナデ後刷毛目	
14	SV1	陶器	皿か?	口径:- 器高:残存2.4 底径:4.3	密	良	外面:灰白、にぶい橙 内面:灰白	外面:- 内面:-	見込:砂目あり
15	SV1	磁器	碗	口径:(9.8) 器高:6.1 底径:3.6	密	良	外面:灰白 内面:灰白	外面:- 内面:-	肥前系、端反碗 見込染付あり
16	SV1	陶器	碗	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:明オリーブ灰 内面:明オリーブ灰、 にぶい赤褐	外面:- 内面:-	肥前系、陶胎染付
17	SV1	須恵器	杯蓋	口径:(15.2) 器高:残存3.7 つまみ径:-	密	良	外面:灰白 内面:明オリーブ灰	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 天井部:ヘラ切り後ナデ	つまみ部分欠損
18	SW1	土師質土器	鍋か?	口径:- 器高:残存4.5 底径:4.4	粗	良	外面:にぶい黄褐 内面:浅黄橙	外面:ナデ 内面:ナデ	砂粒多粗 外面スス付着
19	SW1	土師質土器	鍋か?	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	外面:ナデ 内面:ナデ	外面スス付着
20	SW1	土師質土器	鍋か?	口径:- 器高:- 底径:-	粗	良	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	外面:ナデ 内面:ナデ	外面スス付着
21	SW2	土師質土器	鍋か?	口径:- 器高:- 底径:-	粗	良	外面:浅黄 内面:灰黄	外面:ナデ 内面:ナデ	外面スス付着
22	2面 埋土	磁器	瓶 (胴部)	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:灰白 内面:灰白 胎土色:灰白	外面:- 内面:-	肥前系 内面:無釉 外面:草文か? 2区2面盛土(北区)
23	2面 埋土	土師質土器	土器片	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:にぶい黄褐 内面:にぶい黄褐	外面:ナデ 内面:ナデ後刷毛目	2区2面埋土
24	サブト レ2	土師質土器	内耳鍋片	口径:- 器高:- 底径:-	密	良	外面:灰褐 内面:にぶい黄橙	外面:ナデ 内面:ナデ後刷毛目、貼付	外面スス付着 2区

V まとめ

道照館跡と道照遺跡について

中世の城館跡である「道照館跡」を中心とし、その周辺に広がる集落跡を含め「道照遺跡」として扱うこととした。「道照遺跡（館跡含む）」は、昭和56（1981）年に広島県及び東広島市が発掘調査を実施しており、13世紀頃の集落跡を確認している。



遺跡風景（西から）

今回の発掘調査では、西から東へ延びる丘陵を分断し、館跡を独立させたと考えられる堀跡を確認したが、平坦部では予想以上に削平が著しく中世の明確な遺構は確認できなかった。

石垣状の遺構について

1区は、調査前から耕作地の段差があり、その法面を精査したところ、石垣に見える巨石を検出した。観察した結果、風化していない花崗岩の露呈と判断された。耕作地を造成する際、岩盤が露出したため護岸として利用したのではないだろうか。

堀跡について

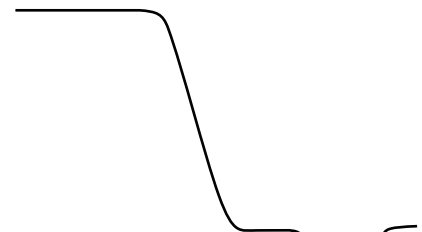
溝状遺構（SW2）は、堀の底部を当初から2段階に設定していたのか、ある程度埋まった後で掘り直したものか不明である。調査区に限られるため確認が出来なかった。

また、堀跡の埋土からは、近世の土師質土器などが出土しており、長期間開口していた可能性がある。

おわりに

今回の発掘調査では、「道照館跡」の西側にも堀跡が存在することが確認された。また、1区法面（SV1）や2区の第1遺構面埋土から江戸時代後半～近代頃の遺物が出土していることから、その頃に大規模な造成が実施され、耕作地を確保していった状況もうかがえた。

なお、調査範囲が限定的で且つ離れていることから、遺構の連続性は確認できなかった。誤解を恐れず言えば、2区は道照遺跡（道照館跡）に関連する遺構であるが、1区は時期も性格も異なる別の遺跡の可能性があるのでないだろうか。今後の資料の増加を待って検討したい。



第10図 SW2 模式図

図版



a. 調査前風景（北東から）



b. 調査風景（南西から）昭和 56 年（1981）年広島県教育委員会撮影



a. 1区遺構検出状況（北西から）

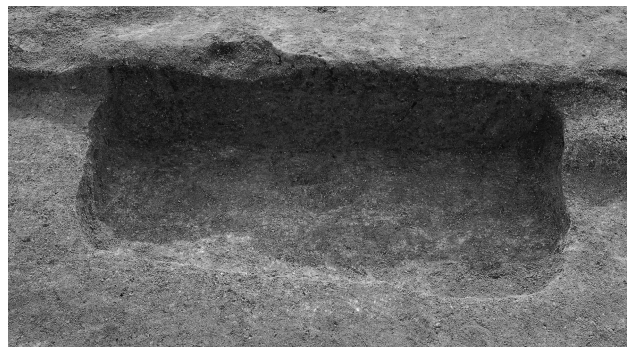


b. 1区完掘状況（北西から）

図版 2



a. SD1 検出状況（北から）



b. SK1 完掘（北から）



c. 護岸の様子（北から）



d. SE1 完掘（東から）



b. 第1面完掘 (東から)



a. 2区作業風景 (北から)

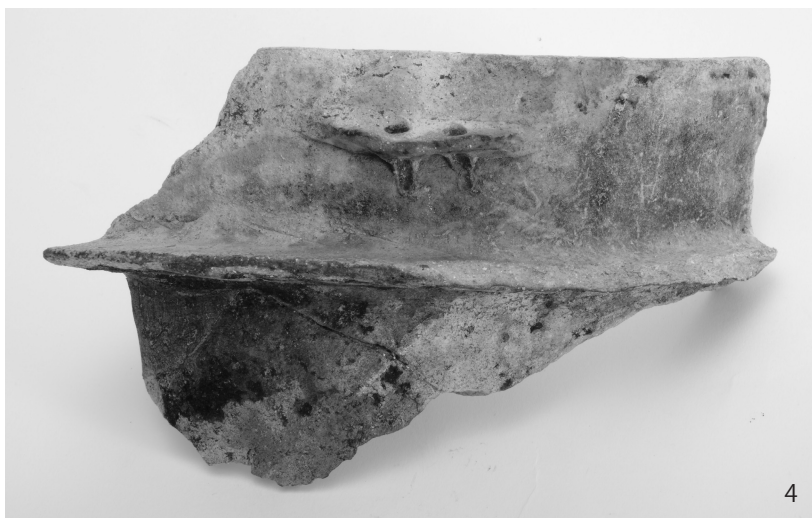


c. SW2完掘 (北東から)

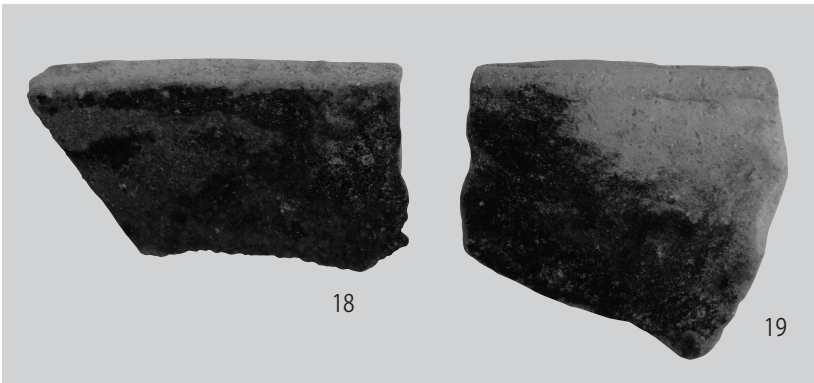
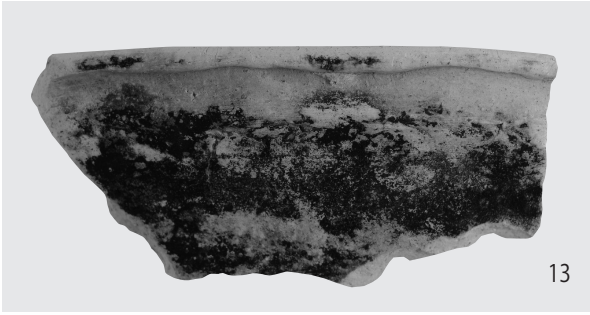
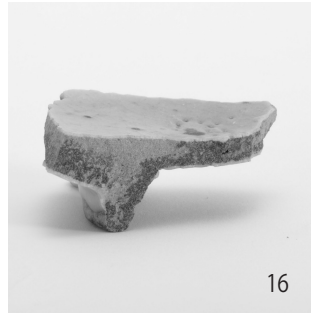


d. 2区完掘 (東から)

图版 4

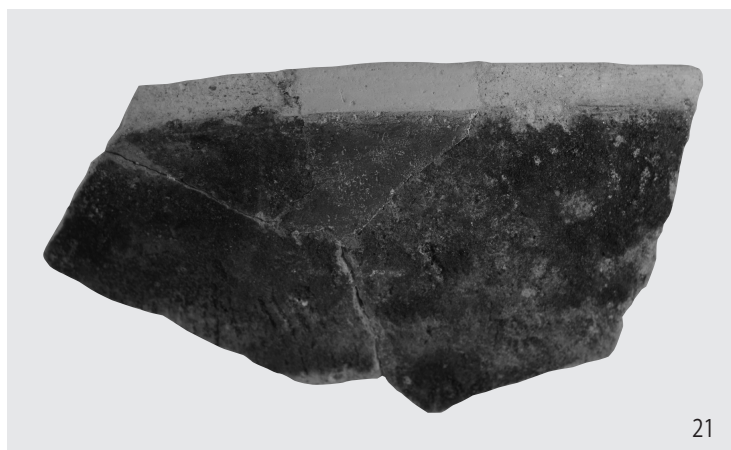


出土遺物 1





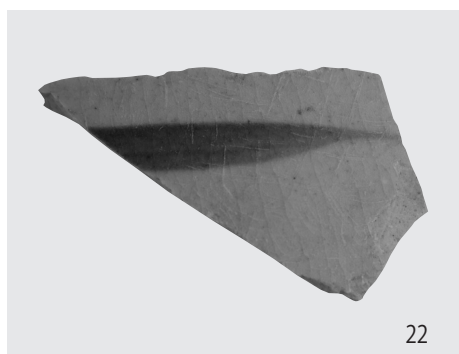
SX1 出土遺物



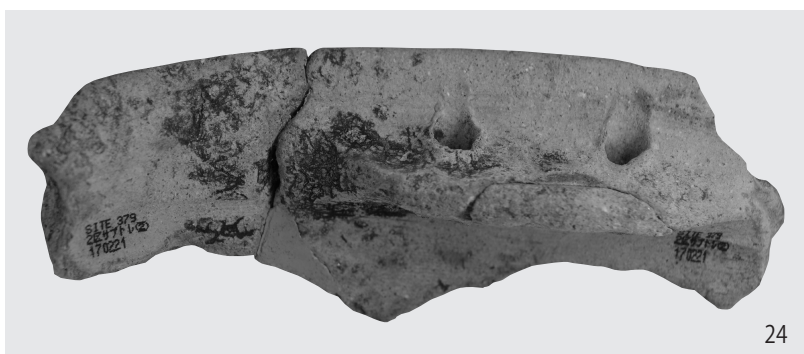
21



23



22



24

出土遺物 3

報 告 書 抄 録

ふりがな	どうしょういせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	道照遺跡発掘調査報告書							
副書名	(仮)御菌宇住宅団地造成工事に係る発掘調査							
巻次								
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 59 集							
編著者名	石垣敏之、盛菜つみ							
編集機関	東広島市教育委員会（東広島市出土文化財管理センター）							
所在地	〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内 651 番地 7 TEL 082-420-7890							
発行機関	東広島市教育委員会							
所在地	〒739-8601 広島県東広島市西条栄町 8 番 29 号							
発行年月日	西暦 2019 年 3 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうしょういせき 道照遺跡	ひがしひろしましさい じょうちようみそのう 東広島市西 条町御菌宇	34212	379	34° 24' 41"	132° 44' 21"	20170213 ~ 20170228	46 m ²	(仮)御菌宇 住宅団地造 成工事に係 る発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
道照遺跡	集落跡 城館跡	中・近世	堀跡 1 条 溝状遺構 1 条 土坑 2 基 性格不明遺構 1 基		弥生土器 須恵器 土師質土器 陶磁器 瓦 鉄滓		中世の館の堀跡 近世の遺構と遺 物を検出	
<p>要約</p> <p>道照館跡に関連すると考えられる堀跡を検出。</p> <p>近世～近代に耕作地確保のために実施されたと考えられる造成の痕跡を確認し、同時期の遺物が出土した。</p>								

東広島市教育委員会文化財調査報告書 第59集

道照遺跡発掘調査報告書

発行日 2019（平成31）年3月29日

編集 東広島市教育委員会（東広島出土文化財管理センター）
〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内 651 番地 7

発行 東広島市教育委員会
〒739-8601 広島県東広島市西条栄町 8 番 29 号

印刷 有限会社アラ・アド
〒739-0022 東広島市西条町上三永 1675 番地